

寄稿

松尾 文夫 (ジャーナリスト)

白けた空気の中での選択

米大統領選 激戦州を歩いて



ようとしていた。「トランプ現象」という特異な政治スタイルを生んだ経済格差の拡大、特にブライ・ホワイト層の不満と挫折感という重い現実が放置されたままだった。



再選を予測できたことを思い出した。いつも案内してくれる地元紙の記者にもう一度車で回っても良かったところ、依然ゼロだとメールが来た。

支持を集めるのか理解できないからだ」と渡航目的を告げると、立派な階級章をつけた白人の女性係官の表情が一変、しばし選挙談義を続けた後、「OK。トランプ氏が入りドしているオハイオを

かいなかった黒人学生を含めて4人。案内してくれた教授によると、実際にはトランプ氏支持者はもっと多く、明らかに多数派だ、とのことだった。

激戦州を手中に収めねばならないためだという。クリントン氏がこのままゴールに飛び込むかと考えた途端、両者の奇妙な共通点に気がついた。老朽化した高速道路や橋梁といった「老大大国アメリカ」のインフラ再整備のために、クリントン氏は5年間で2750億の投資と、インフラ投資銀行の設立を提案している。トランプ氏も同じくインフラ投資の重要性を認め、クリントン案の「倍増」を唱えているからである。

9月末、激戦州の一つで私が2004年以来定点観測を続けているオハイオで4日間を過ごした後、ワシントンに回り、最後はロサンゼルスで第1回のテレビ討論を見た旅で、白けた空気を象徴する現象に気がついた。

しかし、成田から着いたシカゴ空港では、いきなりトランプ陣営の洗礼を受けた。直前に起こったニューヨークなどの爆発テロの影響もあってか、パスポートのチェックは厳重を極め、10本の指の指紋をとられる人もいた。やっと私の順番がきて「オハイオの取材に行く途中だ。外国で見るとトランプ氏のような人物がなぜここまでの

次の日、オハイオ東部ヤングスタウンの州立天学を訪れ、30人ぐらいの教室で、支持する候補を聞くと、トランプ氏に手を挙げたのが5人。クリントン氏支持が、3人し

ヤングスタウンは近くピッツバーグと同様、かつて鉄鋼の町として栄えたところだ。今はフランス、ロシア資本の元で細々と操業しているシェールオイルの精製工場が主な産業で、彼らの親たちは絵に描いたようなブライ・ホワイトであり、トランプ氏の忠実な支持者のことだった。昔の高級住宅街の立派な邸宅も夜は危険な連中が出入りする「麻薬マフィア」の所有だという。

今クリントン陣営が懸命に抱き込みを図っているサンダース氏支持の青年層が強く求めている公立大学の学費免除など、「ヒラリーのアメリカ」が実現したら、レーガン大統領時代から今日までまがりなりにも続く「小さな政府」の政治からの決別、つまりニューディール型の「大きな政府」の政治への復帰といったアメリカの大きな「曲がり角」が見えてきているのではないかと考えている。東京でみた残りのテレビ討論もこうした議論とはほど遠かった。

4年ぶりに訪れたアメリカは、互いに「人気のなさ」を争う民主党ヒラリー・クリントン、共和党ドナルド・トランプ両候補が「建国以来例がない」と嘆かれるのしり合いと暴露を繰り返す白けた空気の中で、11月の大統領選挙投票日を迎え

4年前に優勢を伝えられていた共和党のロムニー候補の写真に混じってかなりの数のオバマ大統領の写真があり、オバマ



米大統領選の第2回討論会で議論を交わすトランプ氏(左)とクリントン氏(右)。9日、ワシントン州セントルイスで9日、共同

クリントン氏が勝利した第1回テレビ討論後も唯一トランプ氏が支持を伸ばしたオハイオからワシントンに入ると、クリントン氏優位の観測が圧倒的であった。一般投票ではなく各州の選挙人の投票で決まるアメリカ伝統の制度では、カリフォルニアなど大州を押さえ、クリントン氏に有利なシビルベニアなど全ての

激戦州を手中に収めねばならないためだという。クリントン氏がこのままゴールに飛び込むかと考えた途端、両者の奇妙な共通点に気がついた。老朽化した高速道路や橋梁といった「老大大国アメリカ」のインフラ再整備のために、クリントン氏は5年間で2750億の投資と、インフラ投資銀行の設立を提案している。トランプ氏も同じくインフラ投資の重要性を認め、クリントン案の「倍増」を唱えているからである。

(まつお・ふみお)